

平成22年5月21日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520629

研究課題名（和文） 近世ヨーロッパ周縁世界における戦争と「帝国」再編

研究課題名（英文） War and Reconstruction of Empire in the Early Modern Peripheral Europe

研究代表者

古谷 大輔（FURUYA DAISUKE）

大阪大学・世界言語研究センター・准教授

研究者番号：30335400

研究成果の概要（和文）：本研究は、近年の近世ヨーロッパ史研究で議論されている複合国家論で典型例とされているスウェーデン、スペインを例にとり、国際戦争後の「帝国」再編過程を分析することから、空間的範囲設定を前提とした特異なスウェーデン民族性を統合軸とするようになったスウェーデン、イベリアとアメリカを自由主義的経済政策により相互補完的に統合したスペインといった複合的国家編成をまとめあげる統合軸の論理の差違を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This project made clear the logical differences of axis to integrate the composite state-formation between Sweden and Spain, which recent European historians have pointed out as the "typical" composite state in the early modern Europe, with analyzing the process of reconstruction of "Empire" after some international war in the 18th century. This project found out that the distinct idea as "Swedish folk" was invented for the integration of conglomerate state with depending on the unique recognition of Swedish area, and on the other hand, the function of state-management of Spain was enhanced with consolidation of the mutually complementary linkage between Iberia and America under the process of reorganization of "Empire"

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：西洋史・北欧史・南欧史・スウェーデン史・スペイン史

1. 研究開始当初の背景

（1）ヨーロッパ世界における近世国家の古典的解釈の一つは、例えば、M. ロバーツが 17

世紀の全般的危機論争の中で提示した軍事革命論のように、近世に現出した諸国家間体系における戦争に対して集約的な国家経営

を行う軍事国家としての解釈であり、それは近代国家の前提として措定された解釈でもあった。

(2) 近年の近世国家を構成した政治・社会的単位の実態解明が進むにつれ、集約的経営を可能だったとする国家観には疑問が呈されるようになり、より実態に即した国家解釈として、J.H. エリオットやH. グスタフソンらが、スペインやスウェーデンの例を基に多様な政体が複合する「複合王朝」論や「複合国家」論を提唱していた。

(3) 単線的な近代国家への発展を前提とした古典的な国家解釈を批判した複合的国家編成という解釈は、多様な政治・経済・文化要素の併存を主張する一方で、それらを統合する軸がどのような過程を経て形成されたのか、複合的国家編成の動態に結論が示されているわけではなかった。

2. 研究の目的

(1) 近年の複合国家論に関する学術的背景を踏まえ、18世紀初頭に経験したスペイン継承戦争と大北方戦争という国際戦争と、それら戦争の結果もたらされたバルト海世界/地中海・大西洋世界における政治・経済構造の変動を踏まえつつ、「バルト海帝国」や「スペイン帝国」と通称され近年の複合国家論の典型例とされたスウェーデン、スペイン国家の実態に肉薄する。

(2) とりわけ「複合国家の再編過程から導出される帰属意識のあり方を分析することによって、戦後の「帝国」再編を巡る議論のなかから複合国家の統合軸が導出され、そこに後世へと引き継がれていく新たな帰属意識の萌芽を検討し、従来の複合国家論が明らかにできていない複合国家編成の動態分析に寄与する。

3. 研究の方法

(1) 研究代表者の古谷は、バルト海世界の人的・物的ネットワークの上に成立した複合国家としてのバルト海帝国論という見地に立ち、王立文書館やウップサーラ大学図書館などに所蔵されている18世紀当時に王国議会やその周辺で帝国再編の議論に関わったイデオログの言説を調査し、大北方戦争以降のバルト海世界における政治・経済変動を背景としたスウェーデンの国家構造の変容について分析した。

(2) 研究分担者の中本は、マドリッド県経済協会付属文書館ならびにスペイン国立図書館における調査をもとに、18世紀スペインにおける政治経済学の言説分析を行い、ス

イン継承戦争以降の地中海・大西洋世界における政治・社会変動を背景としたスペインの国家構造の変容について検討した。

(3) 研究代表者・分担者は、適宜ウップサーラ大学、ルンド大学、バリャドリッド大学などに属する現地研究者と研究交流を深め、現地における最新の複合国家論の動向を踏まえながら、スウェーデン・スペインを往還する近世における複合国家論の比較検討を進めた。

4. 研究成果

(1) 近世におけるスペインとスウェーデンについては、その国家編成上、それぞれの王権の権能の及ぶ範囲が、前者は大西洋を挟みイベリア半島からアメリカへ、後者はバルト海を挟みスウェーデン・フィンランドから北ドイツ・バルト海東岸部へと及んだ。これらの空間的広がりの中なかには、各々に異なる来歴を有する多様な政体や地縁/社会集団を含み、唯一それぞれの王権のみがそれら複数の政体や集団を統括することから、複合的な国家編成の典型として論じられてきた。しかしながら、両者はともに18世紀においてスペイン継承戦争、大北方戦争、オーストリア継承戦争、七年戦争といった国際戦争を経験することによって、18世紀以前から引き継がれた複合的国家編成に大きな変化を経験した。これらの国際戦争の経験から両者はともに近世ヨーロッパの主権国家体制のなかで各々の政治的プレゼンスを低下させ、各王権が束ねる広域支配圏の版図もともに縮小した。スペインに関して言えば、スペイン継承戦争とオーストリア継承戦争の結果として、その版図はイベリア半島とアメリカ植民地にはほぼ限定され、スウェーデンに関して言えば、大北方戦争の敗北の結果、その版図は現在のスウェーデンとフィンランドにほぼ限定された。このような過程を一瞥すると、スペインとスウェーデンが18世紀に直面した状況は、各王権を頂点とする広域支配圏の縮小とそれに伴う国家再編の必要という点で非常に似通っているようにも見えるが、本研究が明らかにした複合的国家編成の再編の道筋は大きく異なるものである。

(2) 大北方戦争後のスウェーデンにおいては、縮小した広域支配圏の版図が伝統的にスウェーデン国制の中核に位置づけられた王国議会への代表選出権をもった領域と合致した。これに伴い、戦後の王国議会や政府において見られた国富増加のための施策の適応範囲が、一なるスウェーデンの空間的範囲として理解される前提を用意することになった。また国富増加のための自然資源の活用の議論のなかから、スウェーデ

ンに独特な自然認識と環境決定論の思潮を背景としながら、一なるスウェーデンの空間的範囲に住まう人間集団の特徴を議論する傾向が見られるようになった。こうした18世紀の国際戦争の経験に刺激される形で創造された集合概念が19世紀以降のスウェーデン民族観に引き継がれることになり、いわば18世紀の戦争と国家再編の過程から、スウェーデンは「理念」としてのスウェーデン概念を見出したと言える。

(3) 七年戦争以降のスペインにおける国家再編過程においては、自由主義的な経済政策の実現によって想定されるアメリカ植民地の利益を充当することによって、イベリア半島の経済的事情の改善が模索された。しかしながらその再編過程にあつては、アメリカ植民地とイベリア半島を包含するような複合的国家編成を相克する統合理念は模索されてはいない。むしろアメリカ植民地とイベリア半島とは別個の市場として想定され、それぞれが活性化することによって相互補完的に経済発展するという道筋が構想された。こうしたアメリカとイベリアを別個の市場単位として捉えつつも、自由主義的な貿易体制をもって両者を結ぶ経済秩序が、いわば七年戦争後の新たな「帝国」秩序だった。それゆえにスペインの場合には、18世紀の戦争と国家再編の過程のなかで「理念」としての一なるスペイン概念は模索されず、あくまでもアメリカとイベリアを結ぶ「制度」としての相互補完的な連携関係が模索されたに留まったと言える。

(4) 本研究の到達点は、(2)、(3)に整理した「帝国」再編過程における具体的な差異を明らかにしたことにある。それは、バルト海にのみ面してスウェーデン・フィンランドに版図が限定されることになった「閉鎖系」複合国家としてのスウェーデンと、アメリカ植民地を持ち大西洋・地中海世界に面した「開放系」複合国家としてのスペインとの差異であったと言えよう。こうした差異が創出された背景を比較するには、例えば、「理念」としての一なるスウェーデンを下支えした王国議会のような国制機関と複合国家を構成していた各々の地域との関係や、「理念」としての一なるスウェーデン概念を用意した自然観や民族観など、それぞれの複合的国家編成に生きた人々に伝統的に懐胎した認識枠などについてスペイン、スウェーデン双方の見地から分析する必要がある。スウェーデン、スペインの双方に共通の検討軸を設けた複合的国家編成を比較は、本研究の今後の課題の一つである。

(5) 本研究が対象とした18世紀にあつて

スペインとスウェーデンはともにブルボン朝フランスと密接な関係をもつ国家であり、両者の経済的・文化的関係は深かった。スウェーデン東インド会社に属する船団の寄港地としてのカディスの存在、ビルバオでの鉄事業を模索したバスク地方の祖国の友経済協会に与えたスウェーデンの鉄産業の知見、スペインを經由しヴェネズエラへの探検事業を企てたカール・フォン・リネーの弟子P.ループリングの事績など、本研究における比較検討の過程で見出された18世紀にヨーロッパ世界の南北を結びつけた歴史的事例には枚挙に暇がない。従って、そのようなスペインとスウェーデンとの経済的・文化的交流を踏まえながら、同時代のヨーロッパ世界の南北で同時進行していた複合国家の再編過程が相互にどのように影響しあったのかを検討するというのも、本研究にとってのもう一つの課題として残されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

- ① 古谷大輔、近世スウェーデンにおける軍事革命-初期ヴァーサ朝からグスタヴ2世アドルフ期におけるスウェーデン軍制の展開-、大阪大学世界言語研究センター論集、査読有、Vol. 3、2010、1-28頁。
- ② 古谷大輔、スウェーデンにおける民族概念の歴史的展開-民族理解と自然認識-、EX ORIENTE、査読無、Vol. 16、2009、67-88頁。
- ③ 中本香、七年戦争を契機とするスペインの「帝国再編」-エスキラーチェの主導する植民地貿易の制度改革を中心に-、Estudios Hispánicos、査読有、Vol. 33、2009、107-132頁
- ④ 古谷大輔、北欧神話と北欧の間-歴史学から見た北欧神話の再考、ユリイカ、査読無、Vol. 39 Np. 12、2007、163-171頁
- ⑤ 古谷大輔、三十年戦争におけるスウェーデン王国の財政構造、IDUN 北欧研究、査読有、Vol. 17、2007、241-258頁。
- ⑥ 中本香、ホセファ・アマルの『男性が就いている官職やその他の役職に対しての、女性の能力と適性を擁護する論考』(1786年)-史料翻訳と解題-、Estudios Hispánicos、査読無、Vol. 32、2007、69-91頁。

〔学会発表〕(計3件)

- ① 古谷大輔、戦争・国家・民族-ヨーロッパの地平から-、国立民族学博物館友

の会午餐会、2010年3月3日、阪急インターナショナルホテル（大阪市）

- ② 中本香、七年戦争と帝国再編—エスキラ—
チェ改革の位置づけをめぐって—、スペイン史学会夏期研修合宿、2009年7月18日、修善寺ユースホテル（伊豆市）
- ③ 古谷大輔、近世バルト海世界とスウェーデン『軍事革命』、日本西洋史学会第58回大会小シンポジウム「近世ヨーロッパにおける戦争と国家—『軍事革命』論の彼方へ—」、2008年5月11日、島根大学（松江市）

〔図書〕（計1件）

- ① 古谷大輔、近世スウェーデンにおける帰属概念の展開—ナショーンと祖国—、近藤和彦編、『歴史的ヨーロッパの政治社会』、2008、総606頁（内75-111頁部分を担当）、山川出版

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古谷 大輔 (FURUYA DAISUKE)
大阪大学・世界言語研究センター・准教授
研究者番号：30335400

(2) 研究分担者

中本 香 (NAKAMOTO KAORI)
大阪大学・世界言語研究センター・准教授
研究者番号：30324875

(3) 連携研究者

なし